



ダイズあってもアズキなし

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 芳賀, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9370



ダイズあってもアズキなし

芳賀 卓

牧野植物図鑑では、コブシの名は蕾の形が拳に似るからとある。しかし私の中には前々からキタコブシの蕾を見るたびにどうしてこれが拳なのかという思いが燻っていた。昨年（2005年）はキタコブシの当たり年で、明治池の傍の木も、大正池通りの並木も春爛漫で、眩いばかり。並木のコブシは花ばかりではなく、その後に実も沢山着いた。1つのコブシの花を見ると、中心には太い軸があり、多くの雌しべがその周りに螺旋状に配列する。受粉の成否かその後の発生によるのか、いずれにしてもうまく種子をつけることが出来たまばらな雌しべだけが膨れて大きくなる。夏の終わり頃にはいくつかの凹凸をもつ塊のような実になり、いかにも握り拳の形になったので、私には実の形こそが名の由来であると実感できた。調べてみるとやはりこちらの解釈が正しいらしい。

名は態を表すというが、ニガキという樹木は、その葉柄を噛んでみればたちどころに名前が浮かぶ苦さだ。アズキナシはナナカマドの仲間だが、赤い実が丸くなくてやや細長く、アズキのような形をしている。つまりアズキのような小さな実をつける梨の意味である。一方、アサダなどのように和名の由来がよくわからない木もある。

十数年前、卒業論文の研究テーマとして、何年かにわたって大学構内や利根別自然休養林の森林植生を調べたことがあった。そのある年、松吉君、西君、そして袋畑君に大正池南側斜面のアサダの多い樹林を共同で調査してもらった。林内に長さ30m、幅10mの長方形の枠を設けて、枠内にあるすべての樹木について、種名、位置関係、高さ、胸高直径、樹冠の広がりなどを縮尺したグラフ用紙の上にプロットしてゆく。林床のササや草本については、さらに小さな枠を設けて被度や群度を記録する。これを何カ所も繰り返して基礎資料を得るのである。作業自体もなかなか骨の折れる地道なものだが、植物に関する知識が十分とはいえない彼らを悩ませたのは、次々に出てくる見られない植物とその和名であった。

調査からの帰り道、彼らは実物と名前が結びつきかけている植物を忘れないように、いろいろな植物の名を語（そら）んじながら歩く。袋畑君が大きな声で「おお、カモメは狡い。」と何度も叫ぶ。何のことかと思ったら、クマイザサなどに絡んで生えるオオカモメヅルを憶えるためのフレーズなのだった。彼らのフレーズ方式の中で、「ダイズあってもアズキなし」や「昼みても朝だ」が生まれた。それぞれアズキナシやアサダに因むのは勿論だが、語呂もよく、妙に面白いので、それ以来、一般市民向けの観察会などでいつも紹介している。

岩見沢校赴任当時、種子植物に関してはほとんど無知だった私は、必要に迫られてトネベツの森に通い始めた。以来36年間、この森と大正池は、私と学生諸君にとってかけがえのない自然のフィールドであった。上に述べた植物の名前にまつわることなどのほか、別の年の卒論で植生調査中、親指ほどもある巨大なオオスズメバチに襲われたり、学生諸君ともどもキノコ汁にしたクサウラベニタケを食べて中毒したりと、失敗談にも事欠かない。それらも含めてすべてが今となっては懐かしい思い出である。

森とそこに棲む生き物は一日として同じ日はなく、人は豊かな奥深い自然のほんの一部を垣間見ているに過ぎない。これまではこちらの時計に合わせて自然を見ざるを得なかったが、これからはようやくそれぞれの生き物や種の時計に即して彼らを見る感覚を持ってそうな気がしている。トネベツの森ばかりではなく、そこにつながる岩見沢校構内の明治池周囲の自然林や、校舎周辺の半自然的植生についても、そのようにして観察を続けたいと思っている。